砂漠の虜囚は淫らに甘く

早瀬 響子
illustration
有馬 かつみ

砂漠の虜囚は淫らに甘く

《立読み版》

早瀬　響子

イラスト　有馬　かつみ

1

――低いモーター音が、部屋の中でずっと続いていた。

「うぅっ……」

唇からくぐもった呻きが漏れ、上村彰（かみむらあきら）は思わず頬を染めた。

だが、はっきりとした声にはならなかった。その口中にはボール状の口枷（くちかせ）が押し込まれているからだ。口枷の両脇には細長い帯状になった黒い革製の拘束具が金具で取り付けられ、顔の周囲をぐるりと巡らせた形で猿轡（さるぐつわ）になっている。両頬に食い込むほどのきつさである。

口だけではない。彰はこの薄暗い部屋の中、放置され、広大なベットにただ一人、全裸で横たえさせられているのだ。ベッドのヘットボードに取り付けられた明かりだけが、その姿を照らし出している。そのまだ少年の体型から抜け出しきっていない、白くしなやかな身体には、口枷と揃いでもう少し幅広の拘束具がありとあらゆるところに食い込んでいた。

ベッド脇の壁には、良く磨き上げられた大きな鏡がはめ込まれている。周囲をぐるりとアラベスク模様の金細工で取り囲んだ、豪奢（ごうしゃ）なものだ。そこに、今の、彰の淫らな姿が映り込んでいた。ベッドの明

かりだけでも、その姿ははっきりと見えた。
ほっそりとした首には、まるで犬のように首輪がはめられ、口枷の革と頭の後ろで、輪になった金具で繋がっている。枷にも金具にもゆとりはないので、少しでも頭を動かすと首が締めつけられる。
さらにその首輪から、身体の前後の中心に、ぐるりと縦割りに革の、帯状の拘束具がかけられ、そこから何カ所か、やはり輪になった金具で繋(つな)がった拘束具が左右対称の形で横や斜めに延びている。拘束具は彰の両胸を絞り上げ、全身を編み込むような形できつく緊縛し、さらに背中に回って背の縦の革帯に繋がっていた。
さらに、両手は後ろに回され、その手首には同じく揃いの革手錠がはめられ、身体を締めつけている拘束具と背中で繋がっている。
「んっ、う……」
その状態で、身体のどの部分をわずかに動かしても、それぞれ厳しく拘束されている上、別の部分に繋がっているのでそちらまでが引っ張られ、さらに締めつけられる。
だがそれで苦しさに思わず身を震わせると、やはり厳しく拘束された下半身や股間に回された革が擦(こす)れ、そこから劣情がこみ上げてしまうのだった。彰の唇から、また苦しげな声が漏れた。

そぎ落としたように締まった腹部は、鳩尾（みぞおち）の位置で横一文字に締めつけられている。その革帯の中心と、両方の腰の部分からやはり金具で繋がった、やや幅広の革覆いが股間の部分を吸い付くように覆っているのだ。

最も感じやすい牡茎から後ろの秘孔にかけての部分は、全てその革覆いの下にきつく押し込まれている。その形はまるで、淫らな下着でもつけさせられているようだった。

その革の下で彰の牡茎は立ち上がった状態のまま抑えつけられ、革の内部に強く押しつけられ、達することも出来ずにいる。ファスナーがその前面に縦につけられているが、今はきっちりと締められている。そのため、内部の牡茎に押されて前の革の部分がわずかに膨らんでいる。さらに太腿と両足首も、揃いの革の拘束具で緊縛されていた。

拘束している革はごく上質で、しなやかで肌に吸い付くように滑らかだった。けれどその為、肌に触れて熱で柔らかになるとかえって容赦なく肌に食い込み、時間の経過とともに緊縛の厳しさが増してくる。少しでも動くと、股から上の拘束具は完全に一体化しているので、全身が容赦なく締めつけられる。あまりに巧みな緊縛だった。

「んんっ、くぅ、ン……」

だが、それだけでは無かった。革に覆われた秘孔から内部に繋がった筒には、小さなローターが押し込まれていたのだ。つるんとした、ウズラの卵ほどの大きさのローターは、筒の中にすっぽりと収まり、細かく振動しながら、内部の肉襞を意地悪く嬲(なぶ)っていた。ずっと部屋に響いているモーター音は、この音だった。ローターが小ぶりで、振動も弱めに調整されているので、伝わる刺激がかえってひどくもどかしい。もちろん、スイッチはここには置いていない。

こんなにも淫らで、残酷な姿で放置されてから、一体どれくらいの時間が経っているのか、すでに彰にはわからなくなっていた。

「俺が戻るまで、そうしていろ。時間はたっぷりある。お前がどんな人間で、今はどんな立場なのか、その身体の骨の髄までわからせてやる……」

息苦しさにぼんやりとした彰の頭の中で、ひどくはっきりと、低い男の声が蘇(よみがえ)った。

それは、彰を奴隷として買ったアラブの大国、ソムニア王国の王子――ラシード・エル・ソムニアの声だった。

年は二十代半ばほど……十八歳の彰よりも、七歳ほど年上だったろうか。まだ若い、浅黒い肌で冷たい美貌のその王子は、まるで既に国王であるかのような堂々たる振る舞いで、初めて会ったときから周

囲の者たちを圧倒していた。
彰を競り落として手中にし、自宅へ連れ帰った彼は、日本に帰してくれと必死に哀願する彰の言葉に一切取り合わず、革の拘束具を使ってその身体を恐ろしいほどの手際の良さでこの体勢に縛り上げた。
さらに体内にローターを埋め込んで、彰にその言葉を告げたのだった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

砂漠の虜囚は淫らに甘く

《立読み版》

発行日　２０１１年９月３０日
著者名　早瀬　響子
イラスト　有馬　かつみ
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。